

教育研究業績書

2021年10月01日

所属： 共通教育部

資格： 非常勤講師

氏名： 木下 健司

研究分野	研究内容のキーワード	
迅速・簡便・安価な遺伝子検査法の研究・開発及びアルコール健康教育	ファーマコゲノミックス、アルコール健康教育、地域医療ネットワーク	
学位	最終学歴	
理学博士、理学修士、理学士	関西学院大学大学院 理学研究科 化学専攻 修士課程 修了	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. UR浜甲子園団地「健康プラザはまこう」	2011年7月～ 現在	浜甲子園団地内に健康相談所「健康プラザはまこう」を解説し、毎週金曜日午後1時から3時まで住民のよろず健康相談を実施中。
2. 薬学部学生委員	2013年4月1日～	2014年4月より浜甲子園キャンパス正門にて始業前にあいさつ指導を開始（不定期）
3. 新入学生オリエンテーション	2014年4月	未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育） 武蔵野大学薬学部
4. 薬学への招待：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年4月	神戸学院大学薬学部
5. 新入学生オリエンテーション	2014年4月	未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）九州大学農学部
6. 初期演習：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年4月	武庫川女子短大・心理福祉
7. アルコール健康教育講義	2014年5月	同志社大学
8. 未成年者飲酒防止出前授業	2014年6月	尼崎市立小園小学校
9. 未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年7月	清教学園高等学校
10. 未成年者飲酒防止出前授業	2014年7月	小豆島池田小学校
11. 初期演習：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年7月	武庫川女子大学英文科
12. 初期演習：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年7月	武庫川女子大学音楽部
13. 武庫川女子大学キッズアカデミー	2014年8月	未成年者飲酒防止出前授業（幼児対象）
14. 初期演習：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年10月	武庫川女子短大・食物
15. 武庫川女子大学教育講演会	2014年10月18日	武庫川女子大学教育講演会において適正飲酒に関する講演を行った。
16. 未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2014年11月	武庫川女子大学食物栄養学科初期演習
17. 食育フェスタ 未成年者飲酒防止セミナー	2014年11月	西宮市保健所主催
18. 未成年者飲酒防止出前授業デモ	2014年11月	貝塚市養護教員研修会 貝塚私立東山小学校
19. 未成年者飲酒防止出前授業	2014年12月	西宮市立瓦木小学校
20. 他大学：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2015年1月～現在	神戸学院大学薬学部、九州大学農学部、武蔵野大学薬学部、別府大学、追手門学院大学
21. 初期演習：未成年者飲酒防止講義（健康飲酒教育）	2015年1月～現在	日本語日本文学科、英語文学科、音楽部、食物栄養学科、薬学科、健康生命薬科学科、健康・スポーツ科学科、心理・人間関係学科 約1200名のアルコール体質検査を実施
22. 小学校：未成年者飲酒防止出前授業	2015年1月～現在	尼崎市立小園小学校、小豆島町立池田小学校、貝塚市立貝塚中央小学校 アルコールパッチテスト法を活用した飲酒防止活動
23. 武庫川学院鳴松会：健康飲酒セミナー	2015年1月～現在	鳴松会神戸支部、西宮支部、和歌山支部、鳴松会「中国・九州・沖縄地区」、「四国地区」地区懇親会
2 作成した教科書、教材		
1. アルコール体質チェックキット	2011年4月	アルコール代謝酵素遺伝子ADH1B、ALDH2の遺伝子多型を解析し、アルコール体質をA～Eに分類する未成年者飲酒防止教育ツールを開発した。
2. 飲酒と健康	2012年4月	アルコール健康教育セミナー用冊子
3. アルコールパッチテストとアルコール体質缶バッジ配布	2012年4月	アルコール体質遺伝子検査は大学生以上を対象に実施しているが、未成年者飲酒防止の初等教育用にはアルコールパッチ法で体質チェックし、判定結果を缶バッジで配布する。
4. 紙芝居：ねこの見た夢	2014年7月	小学生用の未成年者飲酒防止教育教材として紙芝居（15分）を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 東洋醸造(株) 医薬品研究所	1980年～1990年	<p>1)分光分析法を駆使した天然有機化合物の構造決定；即ち抗生物質Mycinamicins, 抗白血病薬 Neplanocins, 抗カビ剤Acleacin, 酵素阻害物質 Sporostatinなど数多くの天然 有機化合物の構造決定を核磁気共鳴装置、質量分析装置、X線結晶構造解析装置等の各種機器分析装置を利用して行った。</p> <p>2)新規医薬品研究開発（製剤、体内動態、生産）における高速液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィーによる簡易分離定量分析法の確立：抗生物質 Rokitamycin, Leucomycin, Mycinamicin, Gentamicin等が研究対象の代表的化合物。</p> <p>3)放線菌由来二次代謝産物の抗生物質マイシナマイシンの単離精製、構造決定、立体化学、誘導体合成及び生合成研究：10数種の新規マクロライドの発見及び生合成中間体の単離構造決定による生合成過程のほぼ全容を解明した。特に、生合成研究は国内外の雑誌に多数引用され、高い評価を受けた。</p>
2. 医薬品製造技術研究部 東洋醸造(株)、旭化成工業(株)	1990年～1994年	<p>1)抗生物質マイシナマイシン、ロイコマイシン、ロキタマイシン、ゲンタマイシン等の工業的製造(精製及び合成)プロセス開発研究：生産性向上を目的とした製造技術研究。</p> <p>2)抗生物質生産菌(ロイコマイシン、ゲンタマイシン)の微生物育種研究：具体的には高生産性菌株の改良探索研究、培養条件検討、スケールアップ(フラスコ培養から150トンタンク培養)及び菌株保存管理。</p>
3. 創薬研究所 旭化成工業(株)	1994年～1997年	<p>1)X線結晶解析及び核磁器共鳴装置を利用した生体関連ペプチド(カルシトニン、h-PTH)及びタンパク質(ピルビン酸オキシデース, CDK2)の立体構造解析：上記、ペプチド、タンパク質の3次元構造における活性部位の予測または高活性、高安定カルシトニンのドラッグデザイン。</p> <p>2)計算機化学による立体構造予測及び構造活性相関：新規医薬品探索のターゲット酵素またはKinase阻害物質の活性予測及び化合物デザイン、具体的にはPLA2, SH2, CDKなど ガン 関連酵素及びKinaseを研究対象とした。</p> <p>3)放線菌、カビの生産する抗生物質及び生理活性二次代謝産物の探索研究：具体的には微生物バンクシステム確立(菌株保存、培養濾液管理、化合物データベース管理、サンプル調整用ロボット導入)、ハイスループットスクリーニングシステム(HTS)導入、機器分析データ解析システム構築(データベース利用による高速構造解析システム)及び抗生物質(抗カビ、抗MRSA、抗結核)、脳代謝関連生理活性物質(セロトニン依存Kinase)探索研究。</p>
4. 山梨大学工学部生物工学科 非常勤講師	1997年4月～1997年9月	<p>担当科目：天然物分析化学</p> <p>講義内容：天然由来の有機化合物の単離・精製方法並びに分離(GC, HPLC)および各種スペクトル(NMR, IR, MS, UV, X-ray等)分析を利用した構造決定に関する講義。</p>
5. 米国ブラウン大学化学科 研究教授	1997年9月～2002年8月	<p>担当科目：大学院生の研究指導</p> <p>講義内容：酵素精製・反応並びに基質合成、遺伝子抽出・配列決定・発現、微生物生産物の同定等を世界各国から集まる大学院生の研究指導を行った。</p>
6. セミナー	2000年～2001年	<p>セミナー1)東京工業大学理工学部セミナー(平成12年5月、大岡山、鈴木啓介教授)</p> <p>2)慶應義塾大学理工学部セミナー(平成12年5月、日吉、梅沢一夫教授)</p> <p>3)東邦大学薬学部セミナー(平成12年5月、津田沼、加藤文男教授)</p>

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
7. 微生物創薬化学研究 東邦大学薬学部微生物学教室	2002年4月～2006年3月	4) 日本女子大理学部セミナー (平成12年 5月、目白、大隅正子教授) 5) いわき明星大学理工学部セミナー (平成12年 5月、いわき市、山浦政則教授) 6) 東邦大学薬学部セミナー (平成13年 6月、津田沼、ホスト：加藤文男教授) 7) 北海道大学大学院理学研究科化学専攻セミナー (平成13年7月、札幌、村井章夫教授) 8) 富山県立大学工学部・生物工学センターセミナー (平成16年6月、富山、古米 保教授)
8. ポストゲノム研究 (株) DNAチップ研究所	2003年～2005年	1) Micromonospora griseorubidaが生産するポリケタイド系16員環マクロライド抗生物質マイシナマイシン生合成遺伝子解析。 2) 大正製薬と共同でマイシナマイシン生合成遺伝子の破壊・改変による新規“非天然”天然有機化合物創薬研究。(契約期間：2002年6月～2003年6月) 3) Micromonospora rosariaが生産するポリケタイド系16員環マクロライド抗生物質ロザミシン生合成遺伝子解析。現在進行中 4) ロザミシン-マイシナマイシン生合成遺伝子を利用したハイブリッド化合物の創製。計画
9. 東京バイオテクノロジー専門学校 外来講師	2003年4月～2003年12月	1) DNAマイクロアレイ (チップ) を用いた疾患関連 (消化器系癌・生活習慣病 (糖尿病)・加齢現象・再生医療) 網羅的遺伝子発現プロファイリング解析並びにマーカー遺伝子探索。 2) 生体試料中微量成分mRNAの増幅・調整方法の開発並びに全処理・ハイブリダイゼーション・データ取得・数値化など一連の遺伝子発現プロファイリング解析の自動化 3) マイクロアレイテクノロジーの研究開発：新規な網羅的DNAマイクロアレイ並びに多検体同時分析可能な小型集積型カスタムチップ等の開発。 4) ゲノム中の遺伝子機能解明されていない小さなRNA (non-coding RNA: ncRNA) 探索方法の開発 5) SNP塩基配列多型 (SNP) 並びにCGH (Comparative Genome Hybridization) 解析手法開発 6) DNAマイクロアレイデータベース構築：遺伝子発現量の絶対値化・標準化 7) バイオインフォーマティクス：統計解析方法論の開発・遺伝子発現ネットワーク解析手法開発 担当科目：遺伝子工学実験法 講義内容：安全に遺伝子工学並びに化学的実験を行うための講義。 担当科目：遺伝子工学 I・II 講義内容：遺伝子工学の基礎に関する講義。
10. 日本大学理工学部教養部 非常勤講師	2003年4月～2006年3月	担当科目：基礎の化学 (3クラス担当) 講義内容：土木工学科、電子工学科などの1年生を対象とした化学の基礎に関する講義。 担当科目：化学概要 講義内容：全学科対象の教員免許取得のための講義。 担当科目：生命の科学 (日本大学理工学部短期学部) 講義内容：1年生対象の教養科目で生命科学に関する最新のトピックスを取り上げた講義。
11. 東京医科歯科大学 客員助教授	2004年4月1日～2005年3月31日	松原謙一 (客員教授) と共にポストゲノム研究講座を主催
12. 住友ベークライト株式会社 神戸研究所 技師長	2005年4月1日～2006年3月31日	遺伝子検査に関する技術開発マネジメント

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
13. 住友ベークライト株式会社 神戸研究所 技術顧問	2006年4月1日～2009年3月31日	プラスチック基板のDNAチップ技術の研究開発
14. 武庫川女子大学薬学部米国留学プログラム	2011年1月～	ワシントン州立大学と一般交流協定を締結を交渉し、新薬5年次にアメリカへ短期留学するプログラムを構築した。現在も本プログラムは継続されている。
15. 徳島文理大学香川薬学部 特任教授	2014年9月～	薬物代謝関連遺伝子多型解析に関する共同研究実施のため
16. 武庫川女子大学鳴松会北陸支部講演	2014年9月6日	演題：アルコール体質チェックと 飲酒の功罪
17. 香川県薬剤師会生涯教育研修会	2014年9月7日	演題：個別化医療の実現に向けた 薬物代謝酵素遺伝子多型解析
18. 武庫川女子大学教育講演会	2014年10月18日	演題：飲酒の功罪とアルコール体質、そして個別化医療は実現するか?
19. 昭和大学 客員教授	2019年4月1日	昭和大学薬学部初年次教育担当
4 その他		
1. 薬友会テニスサークル顧問	2006年4月～	薬学部にテニスサークルを創部し、顧問に就任
2. 薬学部RxESSサークル顧問	2010年4月～	全学のESS同好会から離脱し、薬学部に新たなESSサークルを創部、顧問に就任
3. NHKテレビ出演 ためしてガッテン	2013年4月10日	「緊急告知!お酒でがんのリスクが414倍!?!」
4. NHKテレビ出演 NHKスペシャル	2013年7月7日	「あなたは未来をどこまで知りたいですか～運命の遺伝子～」
5. NHKテレビ出演 あさいチ	2013年7月31日	「ちゃんと知りたい!遺伝子検査」
6. NHKテレビ出演 サイエンスZERO	2013年8月11日	「あなたの運命が変わる!? 遺伝子解読がもたらす医療革命」
7. NHK「高校講座・科学と人間生活」	2015年6月18日	武庫川女子大学における遺伝子教育を紹介
8. MBS ちんぷいぷい 出演	2017年6月1日	アルコール体質検査と健康に関して紹介される。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
1. 特定遺伝子の検出方法 特許公開2010-46042	2010年	
2. Mycinose 生合成遺伝子を導入した微生物 特許公開2010-51243	2010年	
3. 遺伝子型判定方法 特許公開2010-200670	2010年	
4. 特定遺伝子を検出する方法 特許公開2011-19505	2011年	
5. 毛根採集用具 特許公開2011-27617	2011年	
6. 遺伝子型判定方法 WO2011/043365	2011年	
7. 遺伝子の増幅方法、特定遺伝子の検出方法 特許公開2012-157295	2012年	
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 和歌山県立医科大学	2012年～2015年3月31日	和歌山県在住の地域住民における循環器疾患の発症および予後に及ぼす遺伝および環境要因に関する研究
2. 和歌山県立医科大学	2013年～2015年3月31日	アルコール代謝関連酵素遺伝子多型と精神障害の関連性に関する研究
3. 科学警察研究所	2013年7月～2014年8月	飲酒運転常習者とアルコール体質の相関について
4 その他		
1. 浜甲子園団地・大学交流プロジェクト(サブリーダー)	2011年7月～	生活環境学部大坪教授と共同でUR浜甲子園団地の活性化を推進している。毎週金曜日午後「健康プラザはまこう」で健康相談を行っている。
2. 「アルコール体質チェック」キットの事業化	2014年9月	アルコール代謝酵素遺伝子ADH1B, ALDH2の遺伝子多型を解析し、アルコール体質をA～Eに分類する健康飲酒推進ツールをコンピューターシステム会社NSDと共同開発した。
3. 徳島文理大学香川薬学部特任教授(非常勤)	2014年9月24日～現在	香川県の包括的医療・福祉多職種連携ICTネットワーク構築及び小豆島における分子薬剤疫学研究を実施する。
4. 香川県土庄町医療アドバイザー(非常勤)	2014年10月1日～	小豆島の包括的医療・福祉多職種連携ICTネットワーク

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
4 その他				
5. 武庫川学院 防災対策検討ワーキング	2015年4月～現在	構築及び分子薬剤疫学研究を実施する。 2016年2月薬学部キャンパスで防災訓練実施のため		
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Combinatorial Biosynthesis: New Genetic Tools for Organic Synthesis of Polyketide Natural Products	単	2004年04月	J. Synth. Org. Chem., Jpn.	
2. 食品の生理機能評価法 実験系とツールの新展開を目指して	共	2007年03月	建帛社	津田孝範、堀尾文彦、横越英彦 食品の生理機能評価において迅速・簡便測定を可能にするDNAチップの開発及びその利用方法について言及している。
3. 飲酒と健康ーアルコール体質検査と飲酒の功罪	共	2014年1月	日本醸造協会誌 第109巻1号	林田真梨子・木下健司 Health and Drinking: Genotyping for Alcohol Related Genes, and Merits and Demerits of Drinking
4. Markers in the genome can direct medicine	単	2019年8月1日	Science Impact, Volume 2019, Number 7, August 2019, pp. 78-80 (3)	薬剤師による個別化医療の実現、およびPVAスポンジを応用したcfDNA定量法開発に関するチャレンジを紹介
2 学位論文				
1. 理学博士学位論文: 16員環マクロライド抗生物質マイシナマイシンの生合成と立体化学	単	1990年3月	理学博士 関西学院大学大学院	
3 学術論文				
1. Reaction of 4-vinylketene iron complexes with carbon monoxide or tertiary phosphines. Intramolecular carbonylation-decarbonylation rearrangement of the vinylketene skeleton induced by coordination of a ligand: x-ray tricarbonyl phosphine complex crystal structure of a ferracyclopent-2-en-5-one.	共	1979年	J. Chem. Soc., Chem. Commun. 1979: 1979, 579-580	T. Mitsudo, T. Sasaki, Y. Watanabe, Y. Takegami, K. Nakatsu, K. Kinoshita, Y. Miyagawa
2. X-ray molecular structure of a pyridyl-bridged binuclear palladium complex, trans(P,N)bis(bromo-(m-pyridyl)-C2,N)(triphenylphosphin	共	1980年	Chem. Lett. 1980: 1980, 913-914	K. Nakatsu, K. Kinoshita, H. Kanda, K. Isobe, Y. Nakamura and S. Kawaguchi

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
e)palladium(II) 3. Trans-Bromo(2-, 3-, and 4-pyridyl)bis (triethylphosphine) palladium(II) complexes	共	1980年	J. Am. Chem. Soc. 102: 1980, 2475-2476	K. Isoe, E. Kai, Y. Nakamura, K. Nishimoto, T. Niwa, S. Kawaguchi, K. Kinoshita and K. Nakatsu
4. Novel rearrangement of an (?-4,2-pyrone) iron complex	共	1981年	J. Chem. Soc., Chem. Commun. 1981:1981, 22-25	T. Mitsudo, H. Watanabe, T. Sasaki, Y. Watanabe, Y. Takegami, K. Kafuku, K. Kinoshita and K. Nakatsu
5. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. III. Isolation and structures of mycinamicin aglycones, mycinolide IV and V	共	1981年	J. Antibiotics 34 : 1981, 346-349	M. Hayashi, M. Ohno, K. Kinoshita and S. Sato
6. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. VII. Structures of minor components, mycinamicin VI and VII	共	1982年	J. Antibiotics 36 : 1982, 175-178	M. Hayashi, K. Kinoshita, Y. Sudate, S. Sato, H. Sakakibara, K-I. Harada and M. Suzuki
7. X-ray and IR studies on crystal and molecular structure of 4-nitro-2,6-diphenylphenol. Stereochemistry of bifurcated hydroxy-? hydrogen bond	共	1982年	Tetrahedron Lett. 23: 1982, 1173-1176	S. Ueji, K. Nakatsu, H. Yoshioka and K. Kinoshita
8. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. VI. X-ray crystallography of mycinolide IV	共	1982年	J. Antibiotics 35 : 1982, 1243-1244	M. Hayashi, K. Kinoshita, S. Sato and K. Nakatsu
9. The structure of 2' (R)-mercaputo-2'-deoxyneplanocin A :Nucleosides and Nucleotides 48	共	1983年	Nucleosides Nucleotides 2: 1983, 319-325	K. Kinoshita, M. Hayashi, T. Hirano, K. Nakatsu, K. Fukukawa and T. Ueda:
10. The crystal and molecular structure of albocycline	共	1983年	Bull. Chem. Soc. Jpn. 56: 1983, 3042-3046	K. Furusaki, T. Matsumoto, K-I. Harada, M. Suzuki, K. Kinoshita, M. Hayashi and K. Nakatsu
11. The structure of neplanocin C	共	1985年	Nucleosides Nucleotides 4: 1985, 661-668	K. Kinoshita, S. Yaginuma, M. Hayashi and K. Nakatsu
12. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. VIII. Chemical degradation and	共	1985年	J. Antibiotics 38 : 1985, 522-526	K. Kinoshita, S. Sato, M. Hayashi, K-I. Harada, M. Suzuki and K. Nakatsu

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
absolute configuration of mycinamicins				
13. Evaluation of assay methods for isepamicin sulfate in body fluids. Bioassay. HPLC and EIA methods	共	1987年	Jpn. J. Antibiot. 40: 1987, 170-87	M. Morishita, T. Suzuki, K. Serizawa, M. Hayashi, K. Kinoshita and Y. Nakano
14. A novel polyether antibiotics, AC7230 (3-hydroxycezosomicin or its stereoisomer)	共	1987年	J. Antibiotics 40 : 1987, 239-241	S. Yaginuma, M. Awata, N. Muto, K. Kinoshita and K. Mizuno
15. Isolation of proposed intermediates in the biosynthesis of mycinamicin	共	1988年	J. Chem. Soc., Chem. Commun. 1988: 1988, 943-945	K. Kinoshita, S. Takenaka and M. Hayashi
16. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. X. X-ray crystallography and the absolute configuration of mycinamicin IV	共	1989年	J. Antibiotics 42 : 1989, 1003-1005	K. Kinoshita, S. Takenaka, M. Hayashi and K. Nakatsu
17. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. XI. Isolation and structure elucidation of a key intermediate in the biosynthesis of the mycinamicin, mycinamicin VIII	共	1989年	J. Antibiotics 42 : 1989, 1869-1872	K. Kinoshita, Y. Imura, S. Takenaka and M. Hayashi
18. Biosynthesis of mycinamicins by a blocked mutant of <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	1990年	J. Antibiotics 43 : 1990, 1508-1511	H. Suzuki, S. Takenaka, K. Kinoshita and T. Morohoshi
19. Mycinamicin biosynthesis: Isolation and structural elucidation of mycinoic acids, proposed intermediates for formation of mycinamicins. X-ray molecular structure of p-bromophenacyl 5-hydroxy-4-methylhept-2-	共	1991年	J. Chem. Soc., Perkin Trans. I: 1991: 1991, 2547-2553	K. Kinoshita, S. Takenaka and M. Hayashi

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
enoate 20. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. XII. Isolation and structural elucidation of mycinamicin X and XI	共	1991年	J. Antibiotics 44 : 1991, 1270-1273	K. Kinoshita, S. Takenaka and M. Hayashi
21. Mycinamicin Biosynthesis: Intact incorporation of an intermediate by a chain-elongation process in <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	1992年	J. Chem. Soc., Perkin Trans. I 1992: 1992, 1555-1556	H. Suzuki, S. Takenaka, K. Kinoshita, Y. Kogami, T. Fujiwara and T. Morohoshi
22. Mycinamicins, new macrolide antibiotics. XIII. Isolation and structures of novel fermentation products from <i>Micromonospora griseorubida</i> (FERM BP-705)	共	1992年	J. Antibiotics 45 : 1992, 1-9	K. Kinoshita, S. Takenaka H. Suzuki, T. Morohoshi and M. Hayashi
23. Mycinamicin Biosynthesis: Isolation and structural elucidation of novel macrolactones and a seco acid produced by a mutant of <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	1992年	J. Chem. Soc., Chem. Commun. 1992: 1992, 957-959	K. Kinoshita, S. Takenaka H. Suzuki, T. Yamamoto, T. Morohoshi and M. Hayashi
24. X-Ray Crystallography of Leucomycin A5 and Rokitamycin Monomethylacetal	共	1997年	J. Antibiotics 50 : 1997, 975-978	K. Yamashita and K. Kinoshita
25. Structure of Sporostatin (M5032), an Inhibitor of Cyclic Adenosine 3',5' - Monophosphate Phosphodiesterase	共	1997年	J. Antibiotics 50 : 1997, 961-964.	K. Kinoshita, T. Sasaki, M. Awata, M. Takada and S. Yaginuma
26. Enhancement of Mycinamicin production by Dotriacolide in <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	1998年	FEMS Microbiology Letters 167: 1998, 95-100	S. Takenaka, K. Yoshida, O. Yamaguchi, K. Shimizu, T. Morohoshi and K. Kinoshita

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
27. Precursor Directed Biosynthesis of Novel 6-Deoxyerythronolide B Analogs Containing Non-natural Oxygen Substituents and Reactive Functionalities	共	1999年	Tetrahedron Letters 40: 1999, 635-638	D. Hunziker, N. Wu, Kenji Kinoshita, D. E. Cane, and C. Khosla
28. Precursor-Directed Biosynthesis of 16-Membered Macrolides by the Erythromycin Polyketide Synthase	共	2001年	J. Am. Chem. Soc. 123: 2001, 2495-2502	K. Kinoshita, P. G. Williard, C. Khosla and D. E. Cane
29. Precursor-Directed Biosynthesis. Kinetic Analysis Reveals the Biochemical Basis of the Remarkable Selectivity of the Erythromycin Polyketide Synthase Towards Unsaturated Triketides	共	2002年01月	Chemistry & Biology	David E. Cane, Fumitaka Kudo, Kenji Kinoshita, and Chaitan Khosla
30. Organization of the Biosynthetic Gene Cluster for the Polyketide Macrolide Mycinamicin in <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	2003年01月	FEMS Microbiology Letters	Yojiro Anzai, Natsumi Saito, Michiyasu Tanaka, Kenji Kinoshita, Yasumasa Koyama and Fumio Kato
31. Precursor-Directed Biosynthesis: Stereospecificity for Branched-Chain Diketides of the beta-Ketoacyl-ACP Synthase Domain 2 of 6-Deoxyerythronolide B Synthase	共	2003年07月	Helvetica Chimica Acta	Kenji Kinoshita, Chaitan Khosla and David E. Cane
32. Precursor-Directed Polyketide Biosynthesis in <i>Escherichia coli</i>	共	2003年11月	Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters	Kenji Kinoshita, Blaine A. Pfeifer, Chaitan Khosla and David E. Cane
33. Biochemical Analysis of the Substrate Specificity of the beta-Ketoacyl-Acyl Carrier Protein Synthase Domain of Module 2	共	2004年04月	Biochemistry	Jiaquan Wu, Kenji Kinoshita, Chaitan Khosla and David E. Cane

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
of the Erythromycin Polyketide Synthase				
34. The Targeted Inactivation of Polyketide Synthase mycAV in the Mycinamicin Producer, <i>Micromonospora griseorubida</i> , and a Complementation Study	共	2004年09月	FEMS Microbiology Letters	Yojiro Anzai, Yuka Ishii, Yukie Yoda Kenji Kinoshita and Fumio Kato
35. Hybrid Biosynthesis by Targeted Inactivation of Polyketide Synthases in the Mycinamicin Producer, <i>Micromonospora griseorubida</i>	共	2004年12月	The Journal of Antibiotics	Yojiro Anzai, Kenji Kinoshita, Tomoe Seki and Fumio Kato
36. Recapitulation of in vivo gene expression during hepatic differentiation from murine embryonic stem cells	共	2005年09月	Hepatology	Yamamoto Y, Teratani T, Yamamoto H, Quinn G, Murata S, Ikeda R, Kinoshita K, Matsubara K, Kato T, Ochiya T.
37. Synthesis of 2-Methyl 16-Membered Macrolide Derived from Tylosin	共	2006年04月	The Journal of Antibiotics	Yuichi Terui, Kenji Kinoshita, Yoshie Kaneda, Toshi Akashi, Takuya Hamaguchi and Akira Kawashima 大正製薬創薬研究所と共同研究で、16員環マクロライド抗生物質タイロシンの欠点を補い、体内動態に優れた新規マクロライド抗生物質を合成に成功した。
38. Reliable and Fast Allele-Specific Extension of 3'-LNA Modified Oligonucleotides Covalently Immobilized on a Plastic Base, Combined with Biotin-dUTP Mediated Optical Detection	共	2006年12月	Analytical Sciences, 2006, 22(12), 1537.	Y. MICHIKAWA, K. FUJIMOTO, K. KINOSHITA, S. KAWAI, K. SUGAHARA, T. SUGA, Y. OTSUKA, K. FUJIWARA, M. IWAKAWA, and T. IMAI 放射線医学総合研究所ゲノム診断研究グループはMPLEX法を応用して放射線感受性遺伝子のSNP診断予測を可能に出来る事を検証した。
39. Multiple primer extension by DNA polymerase on a novel plastic DNA array coated with a biocompatible polymer	共	2007年01月		K. Kinoshita, K. Fujimoto, T. Yakabe, S. Saito, Y. Hamaguchi, T. Kikuchi, K. Nonaka, S. Murata D. Masuda, W. Takada, S. Funaoka, S. Arai, H. Nakanishi, K. Yokoyama, K. Fujiwara, K. Matsubara プラスチック製のDNAチップ基板上に固定したオリゴDNAがプライマーとしてDNAポリメラーゼにより伸張することを発明した。
40. Detection and identification of species with	共	2008年01月	Journal of Health Science	Yojiro ANZAI, Kentaro FUJIMOTO, Shin SAITO, Kenji KINOSHITA, and Fumio KATO

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
bacterial cells using a plastic DNA array 41. Detection and identification of species with bacterial cells using a plastic DNA array	共	2008年04月	Journal of Health Science	Yojiro ANZAI, Kentaro FUJIMOTO, Shin SAITO, Kenji KINOSHITA and Fumio KATO 大腸菌など細菌特異的な遺伝子配列を固定したマイクロチップをPCRチューブに挿入してPCR反応と同時にチップ上で簡易に検出する方法を開発した。
42. Functional Analysis of MycCI and MycG, Cytochrome P450 Enzymes Involved in Biosynthesis of Mycinamicin Macrolide Antibiotics	共	2008年09月	Chemistry & Biology	Yojiro Anzai, Shengying Li, Mani Raj Chaulagain, Kenji Kinoshita, Fumio Kato, John Montgomery and David H. Sherman 抗生物質マイシナマイシン生合成遺伝子MycCI及びMycGを大腸菌に形質転換、タンパク質合成に成功し、その生合成メカニズムを解明した。
43. Capturing oligo-immobilized PCR tubes to determine the specific gene for soybean and genetically modified soybean in food matrices.	共	2008年11月	Biosci. Biotechnol. Biochem.	Harikai, N., Saito, S., Abe, M., Kondo, K., Kitta, K., Akiyama, H., Teshima R., and Kinoshita K. PCRチューブに固定した大豆及び遺伝子操作体の特異的遺伝子配列を利用して加工食品中の遺伝操作大豆の含量を迅速・簡便に算出する方法を開発した。
44. All-in-one tube method for quantitative gene expression analysis in oligo-dT30 immobilized PCR tube coated with MPC polymer	共	2009年01月	Analytical Sciences	Atsuko TANAKA, Naoki HARIKAI, Shin SAITO, Toru YAKABE, Sohei FUNAOKA, Kanehisa YOKOYAMA, Kazuhiko FUJIWARA, Kyoko IWAOKOIZUMI, Shigenori MURATA, Kenji KINOSHITA 生体試料中のmRNA 発現量を解析する上で、従来、RNA精製におけるコスト及び時間がかかる上に、コンタミネーションが問題であったが、PCRチューブの底面にオリゴdT 30を固定し、生体試料からmRNAを補足し、直接RT-PCRを行う迅速・簡便・安価な遺伝子解析法を開発した。
45. Gene expression assay in blood and various tissues by a single-tube real-time RT-PCR method using an oligo-dT immobilized PCR tube	共	2009年05月	Methods and findings in experimental and clinical pharmacology ?? ?	Harikai, N., ? Saito, S., Tanaka, A., and Kinoshita, K. ポリdTを固定したPCRチューブを使用して、グアニジン溶液で溶解したラットの組織サンプルから簡便に遺伝子発現量が解析できる方法を開発した。
46. Functional analysis of MycE and MycF, two O-methyltransferases involved in the biosynthesis of mycinamicin macrolide antibiotics	共	2009年05月	Chembiochem	Li S, Anzai Y, Kinoshita K, Kato F, Sherman DH. mycinamicin抗生物質の生合成に関与するメチル基転移酵素MycEとMycFの2個のO-methyltransferasesのin vitroの機能の特徴を精査した。各酵素は、S-アデノシル-L- (SAM) のメチオニン依存性デオキシ糖メチル基転移酵素であることが確認された。
47. Optical detection of specific genes for genetically modified soybean and maize using multiplex PCR coupled with	共	2009年08月	Biosci Biotechnol Biochem.	Harikai N, Saito S, Abe M, Kondo K, Kitta K, Akiyama H, Teshima R, Kinoshita K 新規DNAマイクロアレイ法マルチプレックスPCRプラスチック製のプレート上にプライマーを固定して使用する様を開発され、遺伝子組み換え (GM) 大豆とGMトウモロコシを検出する。マルチプレックスPCR産物の拡張子のプライマーに適用されたプレートとスポットは、DNAの塩基配列に対応する固定された可視化された。この方法は、光

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
primer extension on a plastic plate.				学的にトウモロコシのGMの大豆とGMを検出するため、迅速かつ簡単な方法です。
48. Production of rosamicin derivatives in <i>Micromonospora rosaria</i> by introduction of D-mycinose biosynthetic gene with PhiC31-derived integration vector pSET152	共	2009年08月	J Ind Microbiol Biotechnol	Anzai Y, Iizaka Y, Li W, Idemoto N, Tsukada S, Koike K, Kinoshita K, Kato F IZI mycinosyl rosamicin誘導体として同定された mycinosyl-20-deoxo-20-dihydro-12,13-deepoxyrosamicinは、以前、次のバイオコンバージョン技術によって合成されているが、このmycinosyl rosamicinの微生物直接生産の最初の報告である。。
49. Determination of unprocessed genetically modified soybean in foods using simplex and duplex real-time PCR with an internal standard	共	2009年09月	International journal of food science & technology	HARIKAI Naoki, SAITO Shin, TANAKA Atsuko, KINOSHITA Kenji 内部標準法を使用した遺伝子組み換え大豆の測定法を開発した。更に、duplex定量PCR法と組み合わせることで、簡便で精度の高い測定が可能であった。
50. Single-tube genotyping from a human hair root by direct PCR.	共	2009年12月	Anal Sci.	Hayashida M, Iwao-Koizumi K, Murata S, Kinoshita K. 我々は、人の毛根を直接使用してSNPジェノタイピングを行う、迅速・簡便・安価なPCRを開発した。ADH1BとALDH2遺伝子多型は毛根を使用して実証した。DNAの抽出手順を排除され、サンプルの汚染の可能性はかなり減少した。この方法は、生物学および医療の研究室での遺伝子診断に非常に有用である。
51. Gene targeting for 0-methyltransferase genes, mycE and mycF, on the chromosome of <i>Micromonospora griseorubida</i> producing mycinamicin with a disruption cassette containing the bacteriophage phi C31	共	2010年03月	FEMS Microbiol Lett.	Tsukada S, Anzai Y, Li S, Kinoshita K, Sherman DH, Kato F. マイシママイシン生合成遺伝子mycE及びmycFの機能を検証するために、各遺伝子をマイシナマイシンVIの染色体上にクローニングした放線菌が、マイシナマイシンIIIを生産することから確認した。
52. Genotyping of polymorphisms in alcohol and aldehyde dehydrogenase genes by direct application of PCR-RFLP on dried blood without DNA extraction.	共	2010年04月	Anal Sci.	Hayashida M, Iwao-Koizumi K, Murata S, Yokoyama A, Kinoshita K. 乾燥ろ紙血を直接、PCR溶液に添加して、アルコール体質関連遺伝子の増幅を行い、制限酵素反応で一塩基多型変異部位(SNP)をタイピングするPCR-RFLP法を開発した。
53. Isolation and characterization of 23-0-mycinosyl-20-dihydro-	共	2010年06月	J Antibiot.	Anzai Y, Sakai A, Li W, Iizaka Y, Koike K, Kinoshita K, Kato F. ロザミシンの生産菌を遺伝子操作し、新規16員環マクロライド23-0-mycinosyl-20-dihydro-rosamicinの生産に成功した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
rosamicin: a new rosamicin analogue derived from engineered <i>Micromonospora rosaria</i> .				
54. 遺伝子診断教育のための簡便な耳垢型遺伝子多型解析法.	共	2010年07月	分析化学	林田 真梨子, 小泉(岩尾) 恭子, 村田 成範, 木下 健司 遺伝子解析研究の進歩とともに将来が期待される遺伝子診断の分野を高校・大学生に正しく理解させるために遺伝子診断実験の教材化の検討を行った。日本人ルーツ探訪のバイオマーカーとして話題の耳垢型 (ABCC11) 遺伝子の一塩基多型の遺伝子診断を行うこととした。
55. Production of a hybrid 16-membered macrolide antibiotic by genetic engineering of <i>Micromonospora</i> sp. TPMA0041.	共	2012年	J. Ind. Microbiol. Biotechnol., 39, 1693-1701 (2012).	Sakai, A., Mitsumori, A., Furukawa, M., Kinoshita, K., Anzai, Y. and Kato F.
56. Function of cytochrome P450 enzymes MycC1 and MycG in <i>Micromonospora griseorubida</i> , a producer of the macrolide antibiotic mycinamicin.	共	2012年	Antimicrob. Agents Chemother., 56, 3648-3656 (2012)	Anzai. Y., Tsukada, S., Sakai, A., Masuda, R., Harada, C., Domeki, A., Li, S., Kinoshita, K., Sherman, DH. and Kato, F.
57. Long PCR-based genotyping for a deleted CYP2D6 gene without DNA extraction.	共	2014年	Drug Metab Pharmacokinet. 2014;29(3):283-5	Ota T, Hayashida M, Ishii M, Iwao-Koizumi K, Murata S, Kinoshita K.
58. Direct detection of single nucleotide polymorphism (SNP) by the TaqMan PCR assay using dried saliva on water-soluble paper and hair-roots, without DNA extraction.	共	2014年	Anal Sci. 2014; 30(3):427-9	Hayashida M, Ota T, Ishii M, Iwao-Koizumi K, Murata S, Kinoshita K.
59. High Performance and Straightforward Genotyping of the Cytochrome P450 2C9 (CYP2C9) and Vitamin K Epoxide Reductase Complex Subunit 1 (VKORC1) Polymorphisms.	共	2014年7月	Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences, Vol. 40, P402-408, 2014	大田智子, 林田真梨子, 小泉(岩尾)恭子(増見恭子), 村田成範, 木下健司.
60. The ACTN3 gene is a potential biomarker for the	共	2015年	Journal of Molecular Biomarkers &	Kyoko Iwao-Koizumi, Tomoko Ota, Mariko Hayashida, Yasukazu Yonetani, Ken Nakata, Kenji Kinoshita, Yoshio Koyanagi, and Shigenori Murata.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
risk of non-contact sports injury in female athletes.			Diagnosis	スポーツ傷害はすべてのアスリートのための重大な障害になる。女性アスリートは、スポーツ障害、例えば、前十字靭帯 (ACL) 障害の男性より高い危険にさらされている。そこで、我々は、スポーツ中に負傷していた若い女性アスリートの α アクチニン3 (ACTN3)、アンジオテンシン変換酵素 (ACE)、および脱共役タンパク質 (UCP1、UCP2、およびUCP3) の一塩基多型のジェノタイピングを実施し、遺伝子型を持つ筋肉の外傷の発生を比較した。
61. Genetic alcohol sensitivity regulated by ALDH2 and ADH1B polymorphisms is strongly associated with depression and anxiety in Japanese employees.	共	2015年1月	Drug Alcohol Depend. 147, 130-136(2015)	Yoshimasu K, Mure K, Hashimoto M, Takemura S, Tsuno K, Hayashida M, Kinoshita K, Takeshita T, Miyashita K. アルコール関連疾患 (ARD) はうつ病と不安障害を併発しているケースがあり、アルコール代謝酵素遺伝子ADH1BおよびALDH2遺伝子多型との関連性が指摘されている。ARDのリスク増加と遺伝子多型と不安や抑うつとの関連調査を実施した。
62. Functional combination analysis of drug-metabolizing enzymes CYP1A2, CYP2C9, CYP2C19, CYP2D6 and CYP3A5 in the Japanese population	共	2015年1月	International Journal of Medical Sciences	Int J Med Sci 2015; 12(1):78-82., Tomoko Ota, Yuka Kamada, Mariko Hayashida, Kyoko Iwao-Koizumi, Shigenori Murata, Kenji Kinoshita シトクロムP450 (CYP) は、最も臨床的に使用される薬物の代謝に関与している。CYP活性の個人差は、薬物療法の重要な要因である。我々は、CYP1A2、CYP2C9、CYP2C19、CYP2D6及びCYP3A5の遺伝子多型解析を実施するために、新しい簡単なTaqMan PCRジェノタイピングアッセイ方法を開発した。
63. Genetic Alcohol Sensitivity Regulated by ALDH2 and ADH1B Polymorphisms as Indicator of Mental Disorders in Japanese Employees	共	2015年1月	Alcohol and Alcoholism, Vol. 50, No. 1, pp. 39-45, 2015	Kouichi Yoshimasu, Kanae Mure, Marowa Hashimoto, Shigeki Takemura, Kanami Tsuno, Mariko Hayashida, Kenji Kinoshita, Tatsuya Takeshita, and Kazuhisa Miyashita アルコール関連疾患 (ARD) は、他の併存精神障害などの様々な障害を伴うことが示されている。本研究では、精神障害と遺伝アルコール感受性の様々な間の関係を評価した。
64. East Asian Variant of Aldehyde Dehydrogenase 2 (ALDH2*2) is Associated with Coronary Spastic Angina -Possible roles of reactive aldehydes and implications of alcohol flushing syndrome-	共	2015年5月	Circulation 131, 1665-1673, 2015	Yuji Mizuno, Eisaku Harada, Sumio Morita, Kenji Kinoshita, Mariko Hayashida, Makoto Shono, Yoshinobu Morikawa, Toyoaki Murohara, Masafumi Nakayama, Michihiro Yoshimura, Hirofumi Yasue 冠動脈痙攣性狭心症 (CSA) は、日本を含む東アジア人の中で一般的な疾患である。アルデヒドデヒドロゲナーゼ2 (ALDH2)の活性欠損に関連したアルコールフラッシング症候群の有病率 (ALDH2*2) 遺伝子型は、東アジア人の中で流行している。我々は、CSAが日本人においてALDH2*2遺伝子型と関連しているかどうかを検討した。
65. 女子大学生におけるエタノールパッチテストの反応性とALDH2およびADH1B遺伝子多型との関連	共	2015年5月	日本衛生学会誌70巻2号 (2015年5月号)	林田真梨子, 鎌田由佳, 大田智子, 児島沙由梨, 増見恭子, 村田成範, 木下健司 OBJECTIVES: The purpose of this study was to identify associations between ALDH2 and ADH1B genotypes and ethanol-induced cutaneous erythema and assess the accuracy of an ethanol patch test アルコール代謝遺伝子として重要な役割をしているALDH2とADH1B遺伝子について、遺伝子多型のタイプを遺伝子検査により判定し、アルコールパッチテストによる判定とアルコール接触による紅潮反応と遺伝子型の関連性を解析した。解析対象は健康者として20歳前後の女性、約千人を被験者とした結果、非常に良好な相関関係が見出

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
66. Response to Letter Regarding Article : East Asian Variant of Aldehyde Dehydrogenase 2 Is Associated With Coronary Spastic Angina: Possible Roles of Reactive Aldehydes and Implications of Alcohol Flushing Syndrome	共	2015年11月	Circulation. 2015 Dec 15;132(24):e383-4. doi : 10.1161/CIRCULATIONAHA.115.018755.	された。 Mizuno Y, Harada E, Morita S, Kinoshita K, Hayashida M, Shono M, Morikawa Y, Murohara T, Nakayama M, Yoshimura M, Yasue H.
67. Verification and Validation on Single Nucleotide Polymorphism Analysis of Alcohol Metabolism-Related Genes ADH1B and ALDH2, Using Dried-Saliva Samples	共	2015年11月	臨床病理 63巻11号	Shigenori MURATA, Mariko HAYASHIDA, Yuko ISHIGURO-TANAKA, Hiromi IMAZEKI, Emiko HAYASHI, Akira YOKOYAMA, and Kenji KINOSHITA 本研究室で開発した、唾液を水溶紙に採取して直接Taqmanアッセイに用いる遺伝子解析法の検証実験を行った。同じ被験者のサンプルを用いて、国立病院機構久里浜医療センターでは旧来の実験法であるPCR-RFLP法で解析を行い、当研究室では独自に開発した実験法で解析を行い、両者のデータを照合した結果、全て一致する結果を得た。
68. Relationships of alcohol dehydrogenase 1B (ADH1B) and aldehyde dehydrogenase 2 (ALDH2) genotypes with alcohol sensitivity, drinking behavior and problem drinking in Japanese older men	共	2016年1月	Environ Health Prev Med. DOI 10.1007/s12199-016-0507-5	Marowa Hashimoto, Masutaka Watanabe, Yuji Uematsu, Sonomi Hattori, Nobuyuki Miyai, Miyoko Utsumi, Mayumi Oka, Mariko Hayashida, Kenji Kinoshita, Mikio Arita, Tatsuya Takeshita
69. Effects of ADH1B and ALDH2 Genetic Polymorphisms on Alcohol Elimination Rates and Salivary Acetaldehyde Levels in Intoxicated Japanese Alcoholic Men	共	2016年4月18日	Alcohol Clin Exp Res, Vol40, No 6, 2016: pp 1241~1250	Akira Yokoyama, Yoko Kamada, Hiromi Imazeki, Emiko Hayashi, Shigenori Murata, Kenji Kinoshita, Tetsuji Yokoyama, and Yoshinori Kitagawa
70. Variant Aldehyde Dehydrogenase 2 (ALDH2* 2) Is a Risk Factor for Coronary Spasm and ST - Segment Elevation Myocardial Infarction.		2016年5月	Journal of the American Heart Association, 5(5), e003247.	Mizuno, Y., Hokimoto, S., Harada, E., Kinoshita, K., Nakagawa, K., Yoshimura, M., ... & Yasue, H.
71. Ecophysiological		2016年6月	Scientific	Atsuki Tsuruya, Akika Kuwahara, Yuta Saito, Haruhiko

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
consequences of alcoholism on human gut microbiota: implications for ethanol-related pathogenesis of colon cancer		14日	RepoRts 6: 27923 DOI: 10.1038/srep27923	Yamaguchi, Takahisa Tsubo, Shogo Suga, Makoto Inai, Yuichi Aoki, Seiji Takahashi, Eri Tsutsumi, Yoshihide Suwa, Hidetoshi Morita, Kenji Kinoshita, Yukari Totsuka, Wataru Suda, Kenshiro Oshima, Masahira Hattori, Takeshi Mizukami, Akira Yokoyama, Takefumi Shimoyama & Toru Nakayama.
72. Depression, Alcoholism, and Genetic Alcohol Sensitivity Regulated by ALDH2 and ADH1B Polymorphisms among Japanese Community-Dwelling Adults	共	2016年9月13日	Arch Depress Anxiety 2(1): 037-043. DOI: 10.17352/2455-5460.000013 Koichi Yoshimasu, Shigeki Takemura, Kanami Tsuno, Mariko Hayashida, Kenji Kinoshita, Kanae Mure, Tatsuya Takeshita and Kazuhisa Miyashita	アルコール関連障害（遺伝的アルコール感受性）およびうつ病またはうつ病またはARDと同様に、飲酒とうつ病との強い関連性は不明である。2つのアルコール代謝酵素遺伝子、ADH1BおよびALDH2多型によって調節される遺伝的アルコール感受性。日本のホワイトカラー労働者におけるうつ病とこれらの多型。現在の研究では、地域住居の比較的高齢の成人にこの問題が拡大しています。
73. Variant Aldehyde Dehydrogenase 2 (ALDH2*2) in East Asians Interactively Exacerbates Tobacco Smoking Risk for Coronary Spasm — Possible Role of Reactive Aldehydes —	共	2016年11月29日	Circulation Journal, CJ-16-0969	Yuji Mizuno, Seiji Hokimoto, Eisaku Harada, Kenji Kinoshita, Michihiro Yoshimura, Hirofumi Yasue
74. Variant Aldehyde Dehydrogenase 2 (ALDH2*2) in East Asians Interactively Exacerbates Tobacco Smoking Risk for Coronary Spasm — Possible Role of Reactive Aldehydes —	共	2017年1月	Circ J 2017; 81: 96?102 Yuji Mizuno, MD, PhD; Seiji Hokimoto, MD, PhD; Eisaku Harada, MD, PhD ;, Kenji Kinoshita, PhD; Michihiro Yoshimura, MD, PhD; Hirofumi Yasue, MD, PhD	冠動脈性狭心症（CSA）は東アジア人に共通しており、タバコ喫煙（TS）はCSAの確立された危険因子である。アルデヒドデヒドロゲナーゼ2（ALDH2）は、反応性毒性アルデヒドを除去する上で重要な役割を果たし、欠損変異型ALDH2遺伝子型（ALDH2 * 2）は東アジア人の中で流行している。我々は、TSとALDH2 * 2との間の相互作用を、病因の病因をよりよく理解するためのCSAの危険因子として検討した。
75. Development of Novel Genotyping Protocol and Its Application for Genotyping of Alcohol Metabolism-related Genes	共	2019年8月1日	Yakugaku Zasshi. 2019;139(8) Imai M, Kiso M, Sakaguchi Y, Yamamura M, Kawai S, Murata S, Ichikawa A, Kinoshita K.	アルコール体質検査法に関する報告
76. Rapid and Cost-Effective	共	2019年8月1日	Biol Pharm Bull. 2019;42(8):1345	DNAのIns/Deletionの解析法を紹介

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Genotyping Protocol for Angiotensin-Converting Enzyme Insertion/Deletion (Ins/Del) Polymorphism from Saliva. 77. Development of an Inexpensive and Rapid Operation Device for High-Throughput Real-Time Quantitative PCR-Based CYP2D6 CNV Genotyping.	共	2019年10月1日	-1349 Kisoi M, Moritsugu M, Imai M, Fukumoto K, Sakaguchi Y, Murata S, Kawai S, Ichikawa A, Kinoshita K. Biol Pharm Bull. 2019;42(10):1761-1765 Imai M, Kisoi M, Moritsugu M, Murata S, Ichikawa A, Kinoshita K.	迅速・簡便・安価に遺伝子のコピー数多型解析を行う方法を紹介した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. マクロライド抗生物質マイシナマイシンの生合成	単	1989年	第24回天然物談話会	
2. Biotechnology in Japan	単	1991年	メルクレフォーラム(1991年、フランクフルト)	
3. 第39回有機合成化学協会関東支部シンポジウム		2000年05月		ポリケチド生合成酵素の機能と非天然有機化合物創製
4. 東京大学医科学研究所ミニシンポジウム		2003年09月		微生物ファクトリーを用いた有機合成の新展開
5. かずさBTフォーラム「バイオテクノロジーの新展開」		2003年12月		放線菌をナノファクトリーとしたコンビナトリアル・バイオロジーの可能性
6. 第37回日本放線菌学会後援会		2004年10月		ポリケチド生合成酵素の機能と非天然有機化合物の創製
7. 第8回微生物資源ワークショップ		2004年10月		戦略的コンビナトリアル生物学の応用
8. 第2回かずさBTフォーラム		2004年12月		放線菌をナノファクトリーとしたコンビナトリアル・バイオロジーの可能性
9. 東京医科歯科大学セミナー		2005年02月		高感度遺伝子検出法(MPES: Multiple Primer Extension on a Surface)の開発
10. 第11回微生物資源ワークショップ		2005年06月		新方式DNAチップMPEX法の応用
11. 平成20年度食品衛生懇話会		2008年01月		迅速・簡便なノロウイルス検出法の開発
12. 臨床薬学教育における米国臨床研修の現状と展望	単	2013年3月	日本薬学会第133年会(横浜) 教育フォーラム	武庫川女子大学薬学部の海外研修プログラムを紹介した。
13. 第35回日本臨床栄養学会総会 第34回日本臨床栄養協会総会	単	2013年10月5日		演題: 遺伝情報とチーム医療(オーダーメイド医療実現に向けた薬剤師の役割)
2. 学会発表				
1. 大腸菌を用いたポリケチド生合成と微生物変換	共	2001年10月		Kinoshita Kenji, Pfeifer Blaine. A., Khosla Chaitan, Cane David E.
2. ES細胞の肝細胞分化及び成熟化を制御する分子メカニズムの解析	共	2004年12月		山本雄介, 寺谷工, 村田成範, 池田理恵子, 木下健司, 松原謙一, 加藤尚志, 落谷孝広

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. マイシナミシン生産 Micromonospora griseorubidaのPKS遺伝子mycAVの破壊と相補	共	2005年03月		安齋
4. マイシナミシン生産 Micromonospora griseorubidaのPKS遺伝子破壊株によるハイブリッド生合成	共	2005年09月		安齋 洋次郎、木下 健司、関 友恵、加藤 文男
5. DNAマイクロアレイによる迅速な特定微生物試験法の開発	共	2006年03月		安齋
6. 新規遺伝子検出法MPEXを用いた病原性細菌の多重判定法	共	2006年11月		永田洋平、手塚裕和、加藤寛之、藤本健太郎、岩瀬進介、藤原一彦、木下健司、渡辺久夫
7. 細胞溶解からPCRまでオールインワンポット遺伝子発現解析ツールの開発	共	2006年12月		田中温子、齋藤 晋、矢ヶ部 徹、張替直樹、木下健司
8. 迅速・簡便なOn Chip PCRによる遺伝子検出法の開発	共	2006年12月		齋藤 晋、安齋 洋二郎、藤本健太郎、加藤文男、木下 健司
9. プライマー伸長開始反応の塩基識別特異性向上とSNPタイピングへの応用：	共	2006年12月		道川祐市、菅原圭亮、藤本健太郎、木下健司、菅智、大塚好美、藤原一彦、岩川真由美、今井高志
10. DNAマイクロアレイによる迅速な特定微生物試験法の開発 (2)	共	2007年03月		安齋洋次郎、木下健司、加藤文男
11. 新規遺伝子検出法MPEXを用いた病原性細菌の多重判定法	共	2007年05月		永田洋平、手塚裕和、加藤寛之、藤本健太郎、岩瀬進介、藤原一彦、木下健司、渡辺久夫
12. 迅速・簡便なノロウイルス検出法の開発	共	2007年05月		木下健司、田中温子、張替直輝、左近直美、齋藤 晋
13. S-Bio GeneTube を用いたノロウイルスの迅速で簡便なRT-PCR検出法の開発	共	2007年10月		齋藤晋、阿部碧、田中温子、張替直輝、左近直美、木下健司
14. GeneTubeを使用した迅速で簡便なノロウイルスのLAMP及びNASBA検出法の開発	共	2007年10月		張替直輝、阿部 碧、田中温子、齋藤？晋、村田成範、左近直美、木下健司
15. プラスチック製基板上でのLAMP法を用いた遺伝子多型の検出法の検討	共	2007年12月		Sayoko Shimizu, Shigeki Mitsunaga, Shin Saito, Kentaro Fujimoto, Kanehisa Yokoyama, Kenji Kinoshita, Kazuhiko Fujiwara, Minoru Morikawa, Hidetoshi Inoko
16. S-BIO GeneTubeを用いた迅速・簡便なワンステップ RT-qPCR法の最適化	共	2007年12月		田中温子、齋藤 晋、阿部 碧、張替直輝、村田成範、木下健司
17. 高速MPEX-PCR装置の開発及びALDH2のSNPタイピング	共	2007年12月		齋藤 晋、阿部 碧、中西久雄、藤原一彦、木下健司
18. Micromonospora rosariaへの mycinose生合成遺伝子導入による新規 rosamicin誘導体の生	共	2008年03月		飯坂洋平、安齋洋次郎、井出本直樹、李 戯、小池一男、木下健司、加藤文男

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
産について				
19. 市販加工品のアレレルゲン検出	共	2008年05月		新子千晶、牧野明那、荒川史博、伊藤澄夫、張替直輝、村田成範、扇間昌規、木下健司
20. Duplex real-time PCRを使用した内部標準法による遺伝子組換え大豆検査	共	2008年05月		張替直輝、木下健司、穂山 浩、近藤一成、手島玲子
21. Micromonospora rosariaへの mycinamicin生合成遺伝子の導入による rosamicin誘導体の生産	共	2008年07月		飯坂 洋平、安齊 洋次郎、井手本 直樹、李 巍、小池 一男、木下健司、加藤 文男
22. Mycinamicin生合成に関与するCytochrome P450 MycCI 及び MycGの機能解析	共	2008年07月		安齊 洋次郎、Shengying Li、Mani Raj Chaulagain、木下 健司、加藤 文男、John Montgomery、David H. Sherman
23. S-Bio GeneTube を用いたノロウイルスの RT-LAMP 検出法	共	2008年09月		木下健司、田中温子、村田成範、増見恭子、左近 直美
24. Production of rosamicin derivatives in Micromonospora rosaria by introduction of mycinose biosynthetic gene	共	2008年10月		Anzai Y, Iizaka Y, Li W, Idemoto N, Koike K, Kinoshita K, Kato F
25. S-BIO GeneTube を用いたノロウイルス検出one-step real time PCR の確立	共	2008年10月		左近直美、齋藤 晋、川井 淳、中田恵子、木下健司、加瀬哲男
26. S-BIO GeneTube を用いたノロウイルス検出one-step real time PCR の確立	共	2008年11月		左近直美、齋藤 晋、川井 淳、中田恵子、木下健司、加瀬哲男
27. Mycinamicin生産放線菌Micromonospora griseorubidaの mycinose生合成遺伝子を用いた新規マクロライド抗生物質の生産	共	2008年12月		安齊洋次郎、飯坂洋平、李 巍、小池一男、木下健司、加藤文男
28. Mycinamicin 生合成に関与する cytochrome P450 MycCI, MycG 及び ferredoxin MycCIIの機能解析	共	2009年03月		安齊 洋次郎, Shengying LI, Mani Raj CHAULAGAIN, 木下 健司, 加藤 文男, John MONTGOMERY, David H. SHERMAN Micromonospora griseorubida A11725 が生産する16 員環マクロライド抗生物質mycinamicin (M)の生合成には2 種類のcytochrome P450、MycCI、MycG、及びそのredox partner であるferredoxin、MycCII が関与していることが推定されている。本研究では、これら3 種類のタンパクの酵素学的検討を行った。
29. 武庫川女子大学薬学部健康生命薬科学科における 導入教育の取り組みと評価	共	2009年03月		木下健司、村田成範、吉田雄三、市川 厚
30. 迅速・簡便・安価な SNPタイピング法の確立	共	2009年03月		木下健司、大田智子、鎌田由佳、矢野沙基子、矢作晶子、吉原あずさ、増見恭子、村田成範
31. 大豆及び遺伝子組換え大豆のオリゴ固定	共	2009年03月		張替 直輝、齋藤 晋、阿部 碧、近藤 一成、橘田 和美、穂山 浩、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
PCRチューブを使用した定量PCR法				近年、特定原材料や遺伝子組換え(GM)食品などの食品検査において、PCR法が使用されているが、一般的にPCR法には煩雑で時間のかかるDNA抽出が必要である。そこで、オリゴ固定PCRチューブを使用して、食品中の対象DNAを簡便に測定できる方法を開発した。確立した方法をGM大豆の検出に応用した。
32. ワルファリン至適投与量決定におけるASP-PCR法を用いた遺伝子型判定の有用性	共	2009年03月		上田修平、川崎清香、増見恭子、村田成範、木下健司、吉田明弘、角田幹夫、西口工司、平井みどり
33. プラスティック基板上におけるプライマー伸張反応を用いた遺伝子組換え食品の同時可視検出法	共	2009年05月		張替直樹、齋藤晋、阿部碧、近藤一成、橘田和美、穂山浩、手島玲子、木下健司、吉田雄三
34. Mycinamicin生産菌 <i>Micromonospora griseorubida</i> の 0-methyltransferase 遺伝子 <i>mycE</i> , <i>mycF</i> 欠損変異株について	共	2009年07月		塚田 秀一、安齊 洋次郎、木下 健司、加藤 文男
35. <i>Micromonospora rosaria</i> への <i>mycinamicin</i> 生合成遺伝子の導入による <i>rosamicin</i> 誘導体の単離および構造解析	共	2009年07月		酒井 彩美、安齊 洋次郎、飯坂 洋平、李 巍、木下 健司、加藤 文男
36. 高効率なアルコール感受性検査法の開発	共	2009年12月		林田 真梨子、増見 恭子、大田 智子、村田 成範、横山 顕、木下 健司 アルコール体質遺伝子 <i>ADH1B</i> , <i>ALDH2</i> の SNP タイピングを簡便・安価に検査する方法を開発した。
37. マクロライド抗生物質生産放線菌への <i>mycinose</i> 生合成遺伝子の導入	共	2010年03月		酒井彩美、安齊洋次郎、木下健司、加藤文男
38. Mycinamicin 生合成に関与する cytochrome P450 遺伝子 <i>mycCl</i> , <i>mycG</i> の遺伝学的解析	共	2010年03月		安齊洋次郎、木下健司、加藤文男
39. Mycinamicin 生合成遺伝子 <i>mycE</i> , <i>mycF</i> の遺伝学的機能解析	共	2010年03月		塚田秀一、安齊洋次郎、木下健司、加藤文男
40. マクロライド抗生物質生産放線菌への <i>mycinose</i> 生合成遺伝子の導入	共	2010年09月		酒井 彩美、安齊 洋次郎、古川 実佳、三森 暁、木下 健司、加藤 文男
41. GeneTube を用いた微生物増殖性迅速判定法の開発	共	2010年09月		山中実喜子、木下健司、天野典英 PCRチューブに細菌共通の16S rDNAの一部を固定し、細菌rRNAを捕捉して、生きた細菌を迅速に検出する方法を開発した。
42. Mycinamicin 生合成に関与する cytochrome P450 遺伝子 <i>mycCl</i> , <i>mycG</i> の遺伝学的解析	共	2010年09月		安齊 洋次郎、原田 千恵、増田 怜平、木下 健司、加藤 文男
43. スポーツ体質遺伝子 <i>ACTN3</i> の一塩基多型 (SNP) 解析法の開発	共	2011年	第61回日本薬学会 近畿支部大会	大田智子、林田真梨子、増見恭子、村田成範、坂井和明、木下健司 (Development of Single Nucleotide Polymorphism (SNP) in Sports Ability Related Gene <i>ACTN3</i>)
44. 薬物代謝酵素 <i>CYP2D6</i> 遺伝子多型解析法の確	共	2012年	第62回日本薬学会 近畿支部大会	牧野秋那、保田純花、大田智子、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
立				
45. 日本人におけるFT0遺伝子型とBMIの関連性について	共	2012年	第62回日本薬学会近畿支部大会	田島可奈1)、林田真梨子1)、増見恭子1)、村田成範1)、牟礼佳苗2)、竹下達也2)、木下健司1) 1)武庫川女子大学、2)和歌山県立医科大学
46. アルコールパッチテストによる飲酒健康教育	共	2012年	第62回日本薬学会近畿支部大会	児島沙由梨、石井みのり、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司
47. 高等学校における遺伝子教育のための簡便なALDH2遺伝子解析法	共	2012年	第62回日本薬学会近畿支部大会	石井みのり、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司
48. 薬剤師の活躍分野	共	2012年	第62回日本薬学会近畿支部大会	寺田真理恵、正井絵里子、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司
49. 薬剤師国家試験過去問題e-ラーニングの改良および成果	共	2012年	第62回日本薬学会近畿支部大会	大田智子、岸本佳子、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司
50. ファーマコゲノミクス実現に向けた薬剤師の役割	共	2013年	第46回日本薬剤師会学術大会	大田智子、林田真梨子、石井みのり、増見恭子、村田成範、木下健司
51. ファーマコゲノミクス実現に向けたダイレクトTaqMan-PCR法による薬物代謝酵素遺伝子の解析	共	2013年	第23回日本医療薬学会年会	大田智子、林田真梨子、石井みのり、増見恭子、村田成範、木下健司
52. アメリカ薬学研修プログラム	共	2013年	日本薬学会第132年会	木下健司、林田真梨子、萩中 淳、市川 厚
53. 抗ヒスタミン薬服用後の眠気の遺伝子診断	共	2013年	日本薬学会第132年会	大田智子、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司 Genetic diagnosis of the sleepiness caused by taking the antihistamine
54. 薬物代謝酵素 CYP1A2, CYP2C9, CYP2C19, CYP2D6, CYP3A5の遺伝子解析に関する医療薬学的研究	共	2014年	日本薬学会第134年会	大田智子、石井みのり、林田真梨子、増見恭子、村田成範、木下健司 Medical pharmaceutical research on genetic analysis of the drug metabolizing enzyme CYP1A2, CYP2C9, CYP2C19, CYP2D6, CYP3A5
55. 遺伝子に基づいたアルコール教育及び教材作成	共	2014年	第64回日本薬学会近畿支部大会	植山陽子、競和佳、今井美穂、藤本 遼、一ノ瀬理奈、木下健司 ポスター発表 優秀賞受賞
56. PRELIMINARY RESULTS OF PATTERN OF ALCOHOL METABOLISM AMONG DRIVING UNDER THE INFLUENCE OF ALCOHOL OFFENDERS: ASSOCIATION BETWEEN ALCOHOLISM, ALCOHOL USE BEHAVIOR AND OTHER PSYCHOSOCIAL VARIABLES	共	2014年10月6日	ISAM2014 (国際嗜癖医学会の年次大会, International Society of Addiction Medicine, ISAM)	K. Okamura, K. Kinoshita, M. Hayashida, M. Kihiral, R・Kosuge and G. Fujita 飲酒運転者のアルコール代謝のデータをポスター発表
57. 女子大学生におけるエタノールパッチテストの反応性とALDH2およびADH1B遺伝子多型との関連	共	2015年3月	日本薬学会第135回年会	林田真梨子、鎌田由佳、大田智子、児島沙由梨、増見恭子、村田成範、木下健司 近年は女性の飲酒者が増大し、2008年の全国調査では、20代前半の年代ではついに女性が男性を上回っている。健康日本21<第2次>では、未成年者や女性に対する政策が設けられており、飲酒に対する知識の普及が必要とされている。そこで、簡便に飲酒に対する体質を推定し知識の普及を可能とする方法として、エタノールパッチ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
58. 唾液中カフェイン体内動態解析と薬物代謝酵素CYP1A2遺伝子多型の相関について	共	2016年8月27日	第1回日本薬学教育学会大会	テストを検討し、その正確性と有用性について評価を行った。 坂口友唯、競和佳、森次美和子、福本夏絵、岡村昇、山森元博、村田成範、木下健司
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 特許2004-357224：DNA鎖伸長方法、DNA鎖増幅方法およびDNA鎖伸長用マイクロアレイ		2004年		
2. 特許2004-373051：DNA鎖伸長方法、DNA鎖増幅方法およびDNA鎖伸長用マイクロアレイ		2004年		
3. 特許2005-066848：DNA鎖伸長方法、DNA鎖増幅方法およびDNA鎖伸長用マイクロアレイ		2004年		
4. 特許2005-214501：細菌の検出方法		2005年		
5. 特許2005-226101：遺伝子配列の検出方法		2005年		
6. 特許2005-23859：cDNAおよびRNA鎖の製造方法およびスクレオチド固定化担体		2005年		
7. 特許2005-263988：DNA鎖増幅方法		2005年		
8. 特許2006-043351：mRNA捕捉用担体およびmRNAの精製方法		2005年		
9. 特許2006-159097：RNA検出方法		2006年		
10. 特許2006-239912：DNA配列の検出方法		2006年		
11. 特許2007-125982：RNAウイルスの検出方法		2007年		
12. 特願2008-1081238：特定遺伝子の検出方法		2008年		
13. 特願2008-219889：Mycinose生合成遺伝子を導入した微生物		2008年		
14. 特願2009-1090269：遺伝子型判定方法		2008年		
6. 研究費の取得状況				
1. 平成17年度厚生労働科学研究費補助金（創薬基盤推進研究	共	2005年		迅速・簡便・超高感度な新規SNPs検出法による薬剤応答性遺伝子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
事業) 新規 2.平成18年度厚生労働科学研究費補助金(創薬基盤推進研究事業) 継続	共	2006年		迅速・簡便・超高感度な新規SNPs検出法による薬剤応答性遺伝子
3.平成19年度厚生労働科学研究費補助金(創薬基盤推進研究事業) 継続	共	2007年		迅速・簡便・超高感度な新規SNPs検出法による薬剤応答性遺伝子
4.関節リウマチをモデルとした病型・病態予測進行ツールおよび遺伝子検査システムの開発	共	2008年～2010年	厚生労働科学研究費補助金/創薬基盤推進研究事業	関節リウマチの分子マーカー遺伝子の探索及びSNPタイピングを実施 東海大学医学部との共同研究(研究代表者:猪子英俊)
5.平成28年度科学研究費補助事業	単	2016年4月	文部科学省	「保険薬局薬剤師連携による薬効・副作用発現の個人差に関する遺伝的要因の解明」には、遺伝子解析法の簡便化による個別化医療の一般化と、患者に向き合う薬剤師という二つの大きな目的がある。個別化医療の一般化のために、従来の病気になってからの遺伝子解析ではなく、健康なうちに遺伝子タイプを調べておくための技術基盤確立と情報共有に着目した。これは同時に薬剤師が遺伝子情報を用いて、患者の治療を目的とした薬の効能と安全性を最適化する役目を担うことを意味する。本申請では、鎮咳薬の主成分デキストロメトルファンの主代謝酵素CYP2D6の遺伝子多型解析実験系の簡略化とデータ安定性を検証し、患者における薬効・副作用発現の個人差要因を解明し、薬剤師が処方提言できる基盤を構築する。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1.2003年～現在	日本分子生物学会
2.2006年～現在	日本薬学学会
3.2014年～現在	日本衛生学会